

うま獣医のよもやま話 ⑥ 寺田有獣医師

新生児溶血症(黄疸)について

寺田 有 北海道新ひだか町出身
平成4年3月 酪農学園大学酪農学部獣医学科卒業
同年4月 日高軽種馬農業協同組合入社
静内診療所勤務
平成22年2月 荻伏診療所勤務 現在に至る

今回は、季節外れではありますが新生児溶血症、いわゆる“黄疸”についてお話したいと思います。

皆様すでに御存知のように診療事業部では、昭和40年代から昨年まで実施しておりました新生児溶血症検査（黄疸検査）を廃止しました。そして、それに替わる検査として、フォールチェックを導入し、新生児の血液性状や、同時に採血された母馬の血液との交差試験を行うことによって新生児溶血症の早期発見、早期治療に重点をおいています。

ウマの新生児溶血症は、母馬とその子馬との血液型の不適合によって起こります。つまり、初乳中に子馬の赤血球に反応してしまう抗体が多量に含まれている場合、子馬の腸管から吸収されたその抗体と赤血球が反応して赤血球が壊れて溶血するという事です。少々、理解しづらい話ですみません。

ところで生産者の方々にこの疾患を経験した人は何人ぐらいおられるでしょうか？免疫移行不全、ロタウイルスによる下痢やロドコッカスによる肺炎、細菌性の関節炎などに比べると比較的、少ない疾患です。しかし、発症すると重篤で致死的な経過をたどる症例もあり、重要な疾患の一つに数えられています。

発症時期は初乳を摂取してから1～3日ぐらいです。早い場合では摂取後6時間ぐらいで発症した子馬もいましたし、遅い場合では生後2週間で発見された子馬もいました。いままでの調査では、発症時期が早いほど、重篤で死亡する確率が高くなります。

さて、症状ですが貧血になるので元気が無くなり、哺乳する意欲が減少します。寝ている時間も長くなり、呼吸が速くなります。歯茎は白くなり、時間が経つと最終的に黄色くなり、まさに黄疸症状を現します（写真1）。また、赤色尿といった破壊された赤血球の成分を含む尿を認めることもあります（写真2）。なお、重症の子馬では痙攣を伴う神経症状を示し死亡することもあります。

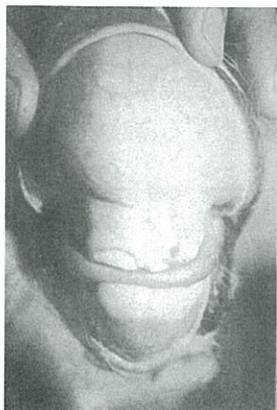


写真1

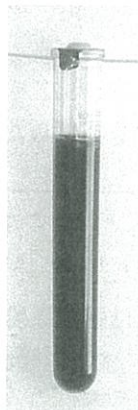


写真2

稟告、血液検査、尿検査、全身症状などから新生児溶血症と診断された場合、次に治療ですが、輸血が必要と診断された場合、母馬の赤血球を輸血する治療法があります。この場合、母馬の赤血球をある工程を経て洗浄したものを子馬に輸血します。これを母馬洗浄血球輸血法と言いますが、この輸血法が確立していなかった頃は、当て馬や他の繁殖牝馬から採血した血液をそのまま輸血する全血輸血が、その子馬に適合するかどうかはわからないまま行われ、さらに症状を悪化させ死亡してしまう子馬もいました。母馬洗浄血球輸血法はこのようなことが起こらない治療法として実施されてきました。

しかしながら、この輸血法には短所もあります。作製工程に長時間を要することや、作製する施設に限られていることです。ですから、発症した子馬の症状にもよりますが、この母馬洗浄血球を輸血する前に残念ながら、死んでしまった子馬もいました。

そこで、これらの短所を解消する治療法として、ある条件をクリアした馬、ユニバーサルドナーと言われる提供馬の血液を全血輸血する方法があります。我々、日高軽種馬農協では現在2頭のユニバーサルドナーを確認しています。写真（写真3）はその1頭です。



写真3

品種はハフリンガーのセン馬です。今年、新生児溶血症を発症し、輸血による治療が必要であった子馬にこの馬の血液を採血し、全血輸血を行いました（写真4、5）



写真4



写真5

この方法ですと迅速に対処することが可能でした。

しかし、ヒトと同様、輸血するために数リットルの血液を短期間で、何回も採血できないので、このようなユニバーサルドナーをさらに確保することが望ましいことです。

最初にも述べましたが、早期発見、早期治療に重点を置くことによって、この疾患の治癒率を上げることが可能となります。生まれてから3日前後は子馬の状態をよく観察してください。出産シーズンはまだ先ですけど…。